

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

伊勢神宮式年遷宮 お白石持行事の感動 穴戸 賢一 山に登るとのこと----- 内田 節
たまに京都人----- 加藤 克俊 年寄りのつぶやき----- 塚原 謙二

： 《新春に寄せて》 ：

佐倉市長 巖 和 雄



『なかま』をご愛読の皆様、新年あけましておめでとうございませう。

市民の皆様におかれましては、健やかに希望に輝く新年をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。また、日ごろから佐倉市政の運営にあたり、格別のご支援をいただきありがとうございます。心より感謝申し上げます。

昨年は、昭和29年3月31日の佐倉市誕生から60周年の節目の年を迎えました。10月25日には市政施行60周年記念式

典を行うと同時に、佐倉市の文化を発信するために音楽祭を開催いたしました。この他、市民の皆様のご協力のもと多様な記念事業を行ってまいりました。

その記念事業の一つとして、8月には、佐倉市と連携協働に関する協定を締結している学校法人女子美術大学の理事長、大村智先生をお迎えし、特別講演会を開催いたしました。世界の医療と福祉に多大なる貢献をされた大村先生の功績は、すべての人たちに希望と勇気を与えてくださったのではないかと思います。また、未来に向けた新たな一歩を踏み出していく節目の事業としましてとても素晴らしい講演会でした。

そして11月には長崎市の田上富久市長をお迎えしての平和講演会もございました。被

爆の実相や核兵器のない世界に向けての取り組みについて、私たちが忘れてはならないとても貴重なご講義をいただきました。この講演をきっかけに、皆様は今一度平和について何が出来るか考えていただければ幸いです。

さて、平成27年の干支は未でございます。本年もここに「未」という文字を書かせていただきました。群れをなす羊は、家族の安泰を示し、いつまでも平和に暮らすことを意味しています。また、未の月にあたる6月は、様々な作物が成熟する大切な季節であり、豊作への願いがこめられています。

本年が実りのある年となりますよう、より一層市政運営に取り組んでまいりますので、ご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。結びに、年の初めに当たり、市民の皆様にとりまして平和で幸多い年でありませう心から祈念申し上げます。年頭のご挨拶といたします。

伊勢神宮式年遷宮

お白石持行事の感動

一昨年知人の神社宮司から伊勢神宮式年遷宮お白石持行事参加の誘いがあった。遷宮諸祭の中、最大級の行事で延べ20数万人が参加する。早速、遷宮行事及びお白石持行事の理解に努めた。

8月下旬、伊勢神宮に向かった。伊勢路に入り、二見興玉神社に参拝、禊を受け、外宮にある「せんぐう館」を見学。翌朝、全身白装束で宿を出発し外宮へ。

伊勢市街に入り数珠つなぎのバスの中に神領民（伊勢市民）の案内の方が乗り込んで来られ、特別神領民（市外からの参加者）に行事の全体像や注意点を丁寧に説明していただく。下車すると早朝から猛暑の予感。朝の部の参加者は約2千人とのこと。この行事は連日続いており規模の大きさを改めて実感した。大通りに2本のどこまでも

続く大綱が導かれ、「神」と

「宮」の木札を下げた私たち引手は向かい合いながら4列に並ぶ。神領民のリーダーの掛け声に合わせて「エンヤ」の掛声等で「お白石奉曳」開始、壮観な行列が掛声とうねりの中で進み、神域（外宮）に到達した。

手水を取り、白布を受け取り、お白石をその上に受け取った。お白石を白布に包み持ち、外宮内を粛々と進み、そして新しく造営された新宮内に進む。遷宮後は入れない領域である。正宮の周囲を進みながらお白石をおさめさせていただいた。その後、内宮を参拝して久しぶりの伊勢路を後にした。

伊勢神宮式年遷宮行事に参加できた喜びと感動と感謝の気持ちはいくらも忘れることはないだろう。

（宮ノ台 六戸 賢一）

山に登るということ

先日、木曾の御嶽山で五十七名の方の尊い命が奪われるという登山史上最悪の事故が発生しました。「御嶽山、あなたの紅葉というお色直しをした美しいお姿を見せて貰おうと沢山の人達があなたのもとに馳せ参じたのに突然お怒りになり多くの人の命を奪っていきましたね。」山好きの小生としては悔しいです、悲しいです、残念です。テレビ新聞等で山の遭難のニュースが出る度に悔しい思い悲しい思いで落ち込みます。

近年中高年の間で登山ブームとやらで安易に登山に出掛ける人が多いと言われますが、絶対にその様な気持で山に登るのは止めて戴きたいと思えます。山はあなたが考えているほど軽くは無いです。小生達が生まれるずっと前からどっしりと構えているのです。山を征服する！ なんと驕

り高ぶった言葉でしょう。山の神様に怒られますよ。自然の中では人間なんてちっぽけな存在なのです。それを征服するだの登ってやるのだの何か勘違いをしているのでは、山はそんな人達に鉄槌を下してきますよ。

また、山は綺麗でいたいのに自己中心の人達の勝手気ままな行動により汚され、荒され、傷つけられて泣いています。

山は言います「あなたが来るまでは綺麗な山だったのに」

そんな事を言われないように山を愛し山に愛され、ちっぽけな人間が大きな山の自然に抱かれて学び育まれ、そんな関係を築いていけたら素晴らしい登山者になると思います。

（大蛇町 内田 節）

たまに京都人

私は京都市育ちである。両親の墓が京都にあるが移す気はない。墓参りを兼ねて、毎年春、秋の2回京都を訪れ、京都人をやる。楽しみにして行くのだから、両親も喜んでくれるだろうと合点している。新幹線と宿が選べる、長めのフリープランがリーズナブルである。市内中心部のホテルを選ぶ。荷物は海外旅行用の大型バッグに入れ、宅急便でホテルに送る。ホテルの食事はないので、食べ歩きができる。朝食はイノダコーヒー本店をよく利用する。昼食、夕食は訪れる場所近辺で評判の店を調べて、予約を入れておく。店探しも楽しみの一つ。町家を改造した食事処も増えている。たまには錦小路をぶらぶら歩きながら夕食を仕入れ、部屋食もいい。

京都で育ったが、京都のことをあまり良く知らない。そ

こで一昨年、京都検定を受験した。試験は合格したが、半端では出来ない試験であった。

受験会場は若い人が大半で真剣そのもの。歴史、寺社、仏像、庭、絵、工芸品、祭り、花街、料理、菓子、地名、言葉、諺、野菜……。あまりの範囲の広さとボリュームに、老化が進む頭が中々ついていかない。苦勞しただけ、終わると京都の楽しみ方が倍増したような気がする。

京都の庭園はどこもピシッと手入れされている。工芸品も一流である。工芸家を輩出する仕組みができていて。企業も老舗だけでなく、京都に本社を置く上場企業も多い。若い人が全国から集まり、伝統を継承しつつ新しいものを作っている。京都は広く、歴史も深い。日本の歴史そのものである。だから何度行っても飽きない。

(ユーカリが丘 加藤 克俊)

年寄りのつぶやき

「おじいさんテレビの音が大きいですよ」と老妻から注意が再三。

「そのうちお婆さんもこうなるよ」などと言いつ返さずに素直に従うのがコツ。

テレビで聞く若い人の歌の日本語が分からない。お婆さんに聞くと「ちゃんと分かりますよ」とのこと。育ちざかりが戦争で、その後の不勉強などもあったせいとか、リズム感がまったく違う。耳も遠いか。

つい最近、八十五歳の同級生を三名私の車に乗せて温泉一泊のミニ同窓会を楽しんだ。高齢者の同窓生グループの会話は声高になりがち。ましてアルコールでも入れば本人たちは上機嫌だが、周りの人にとっては傍若無人の迷惑となる可能性大となる。素面のうちにそこらへんを考えて、ホテルの大食堂では他の客の少

ないホールの隅に席をとった。

今は亡きクラスメートの七十年前のエピソードはもう二十回くらいは聞いている同じ話だが、同級生の話は面白く笑顔で聞ける。同級生は有難いものだと身に染みて感じる。お婆さんに同じ話を三回も聞かせたらおじいちゃんもボケたのかと厳しい眼差しが返ってくる。

戦争中、学徒動員で軍用機組立工場（現在のスバルの自動車工場）で再三の猛爆撃下で逃げ回ったことも懐かしい思い出話となる歳か。

それにしても、「国を守るため、国民の命を守るため」と黄色い声を張り上げる政治家も出てきたが、「また昔と同じ手を使ってきたか」と声を落として眉をひそめあった。

(大蛇町 塚原 謙二)

1月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市錦木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

市民カレッジに入学して最後の四年目を迎えるに当り、今迄の自分の有り方を振り返り心に残った事を記してみます。私は普段は無口の部に属するので、何か話しをするきっかけがあると以前に残っていた事が突然口に出てしまう場合もあり、迷惑をおかけしたときは、大変申し訳なく思っています。

『なかま』の編集に携わる

あとがき

明けて

おめでとうございます

光陰矢の如しといいますが、月日の経つのは早いもので、平成も今年で第2期四半世紀の2年目になりました。

先ずは、蕨市長より年頭に当たり干支の書とご寄稿を戴き巻頭を飾ることができました。心より御礼申し上げます。

さて今年、ひつじの年、おとなしい羊にあやかっ少

事で何かを書こうと思う心が常に意識され、読書の量を増やす循環が生れた事は感謝しています。

自分の周りの人に原稿をお願いしたりして心の張りを常に維持し、今後の自分の方向も少しは開けた様な気がします。在学中困った時はすぐ相談できる場がありとても助かりましたが、今後は同窓生の力を借りてやっいていく予定です。

(太田 誠一)

しても平和で穏やかな年になるようお願いいたします。

ところで『なかま』が始まって今年11月で40年目になりますが、創刊以来、一回も切れることなく発行を続けています。

これは偏ひとへに市民の皆様からの投稿あつてのことですが、これからも楽しい紙面作りに努めていきたいと思えます。今年もご投稿をお待ちしています。

(金井 義彰)